
宇宙いっぱいの愛

折原 奏

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

宇宙いっぱいの愛

【コード】

N9957B

【作者名】

折原 奏

【あらすじ】

大学に入学したばかりの結城咲良ゆいぎさくらは、星空研究会というサークルの先輩、三年の上原陸かみへはらりくを、自分のアパートへ連れて帰り、同居をはじめめる。

プロローグ

「陸先輩、しっかりしてくださいよ!」

道路の端に座り込んで眠ってしまった上原陸先輩を、結城咲良は懸命に介抱していた。

大学のサークルの飲み会で、完全に酔っ払いと化してしまった陸を、みんなから押し付けられたのである。

陸は、付き合っていた彼女に昨日振られたらしい。彼女と一緒に住んでいたアパートも、昨日限りで追い出されたと言っていた。それでヤケ酒だったのだろう。結局悪酔いしたらしく、何度もトイレで吐いていた。

自業自得だと言ってみんなは帰ってしまったが、陸をほおっておけなかった咲良は、こうして陸を、揺さぶっていると云うわけだ。

とりあえずタクシーを拾った。

「先輩、タクシーに乗りましょう」

咲良が陸の耳元で言うと、陸はうつすらと目を開けた。

「ああ、ごめん……」

そう言って陸は、何とか自分でタクシーに乗ってくれた。

行く当てのない陸を、咲良はしょうがなく自分のアパートへ連れて帰った。

第一話に続く

第一話

咲良は大学に入学して、一人暮らしを始めて一ヶ月になる。三年の陸の勧誘で、星空研究会と命名されたサークルに入って二週間目に今日の飲み会があった。

星空研究会と言うのは、名前の通り、星に関する事について研究するサークルだ。

夏休みには天の川を見にキャンプに行ったり、プラネタリウムに行ったり、希望者は、市が開催する観測会にも参加できると説明された。

陸は、星のほかにも天体全部に興味があるらしく、入会したばかりの咲良に熱心に話を聞かせてくれた。宇宙の話は、咲良も好きだから楽しかった。

他のメンバーたちは、サークルに入っただけのものはいるものの、それほど真面目に活動しているわけではなく、熱心な陸にちょっと引き気味だ。

とにかく陸の話は長い。好きな話だから全部を事細かに話したいのだろうが、聞くほうは、うんざりしていることが多いらしい。

そんな陸の話を、嫌がらずちゃんと聞いていた咲良だから、自然と話をする機会が増えていった。

そうやって勧誘のときからお世話になっているし、実を言うと咲良は物知りな陸を尊敬しているし、いい人だと思っているから、今日だってほおっておけなかったのだ。

やっとのことで陸をベッドに寝かせると、咲良はふうつとため息をついた。

「連れてきちゃったけど、どうしよう」

一人暮らしを始めて、まだとりあえず必要なものしか揃えていない。余分なふとんなんかないのだ。真夏ならバスタオルくらいあれば床にだって寝れるけれど、まだ五月になったばかりで、それでは

風邪をひいてしまつかもしれない。

シャワーを浴びて、パジャマに着替え、そしてベッドに寝かせた陸の寝顔をじっと見た。

「いっか。熟睡してるし」

咲良は陸の隣に潜り込んだ。一応背を向けて寝たものの、かなり緊張してなかなか眠れなかった。

陸より先に目が覚めた咲良は、起きて朝食の用意を始める。

今日は日曜日だ。まだ陸を起こさなくてもいいだろう。ゆっくりと支度にとりかかる。

たまご焼きを焼いて、味噌汁を作った。焼き魚でもあれば格好がつくが、なかったのでウインナーを焼いて、ほうれん草のゴマ和えを作った。

そしてご飯が炊き上がる頃になってようやく目を覚ました陸は、目をこすりながら首をひねった。

「あれ、俺……なんで？」

陸は部屋を見回し、キッチンにいる咲良に目をとめる。

「咲良？ 何で。ってここ咲良の家？ あれ、俺きのう……」

戸惑った様子で陸は自分の体を確かめるように触っている。

「先輩。昨日かなり酔ってて大変だったんですよ。ここまで連れてくるのがやっと。今まで熟睡でした」

だから心配するようなことは何もありません、と笑って返す。

「そうか。悪かったな、迷惑かけた」

「いいです。それより朝ごはん食べませんか？」

咲良はテーブルに食器を並べた。

「すっげー、これ咲良が作ったのか」

「はい。何もありませんけどどうぞ食べてください」

そう言っただけで咲良は陸に箸を渡した。

すっげー、と言われるほどのメニューではないが、褒められて素直に嬉しい。

「じゃ、遠慮なくいただきます」

嬉しかった。陸がおいしいおいしいと言って食べてくれる。

「いいよな、こういうの。毎日こんなんだったらいいな」

ポツリと陸が言った。しかも涙ぐんでいる。

「先輩？」

咲良はそんな陸を目の前にして、ちよつともらい泣きしそうになった。

「住むところ決まるまで、ここにいてもいいですよ」

咲良の言葉に陸はハッと顔を上げた。

「行くところないんですよね。昨日、飲みながらそう言っていましたよね。先輩さえ良かったらしばらくここにいても……いいです」

「いいのか？ 俺、男なんだけど。一応、男」

「一応じゃなくて、男でしょ」

「いや、そうじゃなくて。いや、そうなんだけど。あの、その、もし何かあったらとか、考えないわけ？」

「はい。先輩に限って何もないと信じてますから」

咲良があまりにハッキリと信じていると言った手前、陸は何も言えなくなってしまったようだ。

「ところで先輩。荷物とかどこに置いてあるんですか？」

「荷物はまだ、あいつの。別れた彼女のところに置いてある」

「じゃあ、朝食がすんだら取りに行きましょう」

「本当にここに住んでもいいのか？」

陸はもう一度、確認するように咲良に聞いた。

「いいです。先輩にはサークルに入ったときからずっとお世話になっているし、いい人だってわかってますから。困ったときはお互い様です」

でもちゃんと家賃と光熱費は半分払ってくださいね、と咲良はにっこり笑って付け加えた。

午前中のうちに陸は荷物を取りに行った。

荷物と言っても、身の回りのものだけだ。小さなポストンバッグひとつしかなかった。

「まさに、身ひとつで出てきたって感じですね」
帰ってきた陸を見て、咲良は笑った。

「じゃあ適当に寛いでいてください。私、今からバイトなので行っ
てきます。あ、合鍵作っておきました」

咲良は陸に鍵を渡す。

「合鍵。何かやること早いな」

「だって、いるでしょう？」

首をかしげた咲良に、陸は「そうだけど」とうなずく。

「じゃ、行ってきます」

まだ一緒に住むことに実感がないらしい陸を置いて、咲良はでか
けた。

咲良は土日だけ、昼間から夕方にかけてファミレスでバイトをし
ている。

今日も忙しくて、勤務時間の五時まで休む暇もなかった。

五時になり、更衣室で制服を着替えていると、ふいにドアが開い
た。

「やだ、涼くん。またのぞき？」

慌てて咲良は前を隠した。

「ここは女子更衣室だって何度言えば……」

咲良の言葉を無視して、桜井涼は中に入ってきた。

涼は、咲良と入れ替わりにバイトに入る男の子で、まだ高校生だ。

「いいじゃん。いつものことだし。咲良しかいねーんだし」

「涼くん、ダメってば。もう時間でしょう。早く行きなさいよ」

こっちに向かって手を伸ばしかける涼をかわすようにして、咲良
は言った。

「はい。じゃあお疲れ」

涼はあっさりと引き下がって更衣室を出て行った。

「はあ」

一人に戻ると、咲良は深いため息を落としてしまう。

涼とは何故か、もう一ヶ月の間こんな調子である。

高校生は何を考えてるのか、ちっともわからない。

更衣室にはちゃんと鍵があるのだが、壊れていてかからない。早く修理をして欲しいと言っているのだが、ドアに使用中のプレートをかけておけばいいだろうという理由なのか、後回しにされているようだ。

もうひとつため息をついて、咲良は着替えを済ませた。

第二話へ続く

第二話（前書き）

咲良と陸の共同生活は順調に進んでいたが、バイト先の高校生、涼が咲良に近づいて……。

第二話

いつも真っ暗で、しんと静まった部屋に帰ってくる咲良は、部屋の明かりがついていることにホッと心が癒された。

「お帰り。いつもこんなに働いてるの？」

迎えてくれる人がいるのはとても嬉しいと思う。

「働かないと、食べていけただけで精いっぱいなんだもん」

たくさん遊びたいし、と咲良は言った。

親が送ってくれる仕送りは、生活費に消えてしまう。オシャレもしたいし、おいしいランチだって食べたい。それに昨日のように飲み会があったら、お金なんてあつという間に消えてしまうのだ。たくさん遊びたいために働いている。そう言っても過言ではないと思う。

「俺も、早くバイト探すから」

「そうそう。ちゃんと稼いでくださいよ、先輩」

「冗談交じりに言ってから、シャワーをするために咲良はバスルームに行った。

陸との同居生活が始まって十日が過ぎた。

ちゃんと陸は約束を守って、バイトを始めた。

食事の用意や後片付け、ゴミだしにいたるまで陸はちゃんと分担してくれた。

それに、新しい布団を買って来たとは言え、ワンルームの部屋だからすぐそこに陸が寝ている。そんな状況でも、咲良に指一本触れてこない。やっぱり陸はいい人だった。これならいつまでいても構わない。

「でさー、月って地球の動きに影響を与えてんだって。23・5度の傾きがその理由。すっげーよな。きつちり計算されてんの」

「すごいね」

陸の話に笑顔でうなづく。

「そもそも地球の存在自体がすごいんだって」

「すごいね」

陸は延々と宇宙の話が続ける。

宇宙の中にある地球の存在もすごいと思うけれど、それよりも陸の熱く語る表情がすごいな、と思う。好きなことを話しているその表情は、生き生きと輝いて見えた。

「咲良ー。明日、映画行こうよ。って、あれ？ まだ着替えてねーじゃん」

次の日のバイトの終わりがけ、更衣室に涼が入って来て言った。

どうせ今日も乱入は予測できていたから、咲良はまだ着替えていない。

「涼くんが出てっから着替えることに決めたの」

「残念。咲良の下着姿、見れるの楽しみなのに」

大袈裟にため息をつく、涼はいきなり咲良を抱きしめる。

「ちよつと、涼くんっ」

かわす間がなかった。

「咲良、オレの彼女になつてよ」

「ええっ！」

「そんなに驚くなよー。オレのこと、嫌い？」

「今までそんな素振りも見せなかったくせに、急に言われても信憑性に欠けるっ」

「素振りもなにも、最初から咲良のことが気に入ってたから、いつも来てんじょんか。やっぱり咲良って鈍感だな」

鈍感って言われても……。

今まで涼は、単なる覗き趣味なのかと思っていたのだ。咲良だけじゃなく、誰に対してもやってるんだとばかり思っていた。

ここで会う以外は、涼とはなにもない。携帯の番号も知らないし、どこの高校に通っているのかさえ、知らなかった。そりゃあいつも覗きに来られていれば、全く意識していなかったなんてことはないけれど。

「なー、咲良あ。付き合おうよ、付き合って?」

甘えるようにお願いされる。

いい人かどうかもわからない。性格だつてつかめない。趣味も家族も何も知らないのに、付き合えるだろうか。

「好きなんだもん。咲良ー、ねー。嫌いじゃないなら付き合おうよ。ギューギュー抱きしめられて、困ってしまった。」

「私の、何を知ってるのよ。どこが好きだつてゆーの?」

「そんな顔じゃん。咲良、カワイイ」

「顔? 顔しか知らないんじゃないの?」

「いいじゃん、顔も咲良の一部。良く顔より性格が大事つてゆーヤツいるじゃん? けど、一番目につくのは、顔だよ。顔から好きになつて、何が悪い」

そういうの、ヘリクツつて言うんじゃない?」

「咲良、オレの顔キライ? コレでもオレ、学校じゃかなり人気あるんだよ。涼くんと付き合いたって女の子いっぱいなんだ。そんなオレと付き合えるの、嬉しくない?」

それじゃあ、いっぱいいる女の子と付き合つてやればいいじゃない、と思つたが……。

「とりあえず。お試しでいいから付き合つて」

涼は咲良の体を解放すると、いきなり目の前で土下座した。

「とりあえず……でいいなら」
断れなかった。

咲良の曖昧な返事に、涼は思った以上に喜んでいた。

バイトから帰ったとき、部屋の明かりが消えていたことに一瞬ド

キンとした。

「陸？」

まだ七時にもなっていないと言うのに、陸は咲良のベッドで眠っていた。

とりあえず陸がいたことにホツとする。

バイトを始めたばかりで疲れているんだろう。

起こさないように気をつけながら、咲良は夕食の用意を始めた。

今日のメニューはハンバーグだ。野菜かごから玉ねぎを取り出し、皮をむいた。まな板の上で半分に切ってからみじん切りにした。

今日の玉ねぎは、やけに目にしみる。涙を拭き拭き玉ねぎと格闘してたら、

「おかえり、咲良」

目をこすりながら、陸が起きてきた。

「なんか、今日すっげー疲れてさ。ああ、なんだか目も痛い」

それは玉ねぎのせいだ。

「咲良も疲れてるのに、俺ばかり眠っちゃって……って、どうしたんだよ、何で泣いてんの？」

涙を流している咲良を見た陸は、驚いたように咲良の顔を覗きこんだ。

「まさかバイト先で何かあったのか？」

「違うよ。これ、玉ねぎが目にしみただけ」

エプロンで涙を拭いながら咲良は言った。

「心配した？」

「まあ。けど何でもないなら、いい」

陸は言って、テーブルの上を片付け始めた。

料理は咲良の担当だけど、後片付けは陸の仕事に決めてある。今日も夕食が済むと、陸が食器をキッチンまで運んでゆく。

「あのさ、咲良」

陸が食器を洗いながら言った。

「明日、竜輝りゅうきと夕飯食う約束なんだ」

「あ、私も。明日は……」

そこまで言つて、咲良は言葉を濁す。

「咲良も用事？」

「うん。バイト先の人と映画に行く約束したんだ。たぶん遅くなるから、陸には外食してもらおうって思ってた」

「俺も竜輝に誘われたものの、咲良にひとりで夕食食わせるのってかわいそうだなーとか思ってたからさ、咲良も誘おうかって内心考えただけど、それなら良かった」

それなら、そのほうが絶対楽しいと思う。

竜輝は、同じサークルの先輩で、陸の友達で面白い人だ。

「バイト先の人って、男？」

陸が聞いた。

「うん。しつこく誘われちゃったからしょうがなく」

「乗り気じゃない？」

「うーん。そうでもないようなあるような」

「なんだ曖昧だな。嫌なら行くのやめれば？」

「でも、もう付き合つて言っちゃったし」

携帯の番号を聞くのを忘れたのだ。行かなかつたら待ちぼうけさせてしまつたらう。

「付き合ってるの？」

「あー、うん。彼の熱意に負けて、ちょっと強引にね。今日から付き合つことにしたの」

流されるようにうなずいたんだ。

「熱意ねえ。…まあいいけど。最初からあんまり飛ばすなよ」

「飛ばすって？」

咲良は首をかしげた。

「いきなりホテルとか行くなよってこと。誘われても付いて行くなよ」

男はみんな下心があるんだ、と陸は言った。
洗い物が終わって、タオルで手を拭きながら陸は咲良の傍に座った。

「みんなってことは陸もあるの、下心
陸をじつと見つめて、咲良は聞いた。」

「俺は特別出来た男だから。大丈夫だってわかってんだろ？ 今まで暮らして咲良になんかしたか？」

偉そうに胸を張って威張っている。

「そうだね」

「でも、咲良に彼氏が出来たんなら、こづいうのも解消するべきなんだろうな」

ふいに陸が言った。

「こづいうのって、同居のこと？」

咲良の言葉に陸はうなずく。

「やっぱ、自分の彼女が男と暮らしてるなんて、俺だったら嫌だな。きつとそいつもいい気しねーと思うよ。解消だな、同居」

「行くところ、ないくせに」

陸は、咲良の言葉を無視して立ち上がると、布団を出して床に敷いた。

「陸とのこの生活楽しいもん。出て行くことないよ。いればいいじゃん」

咲良は陸の背中に向かって言った。けれど陸は答えてくれない。

咲良は陸の傍まで行くと、顔を覗き込むようにしてもう一度聞いた。

「何で無視するのよ。楽しくないの？ 陸は」

陸はチラッと咲良を見ると、すぐに目を伏せ大きなため息をついた。

「どうしたの？」

「なんでもない。俺やっぱり疲れてるんだな。悪い、もう寝る」
陸は布団に潜り込んでしまった。

「変な陸！」

咲良はわざと大きな声で、陸に言葉をぶつけた。

第三話に続く

第三話

涼と映画を見に行った帰り、夕食を食べるために、駅ビル内にあるカフェレストランまで行くことになった。

駅前にバスセンターがあって、その上がビルになっている。

九階建てのそのビルは、各階ごとにいろんな店が入っているのだ。映画はあまり面白いとは言い難かったけれど、涼は映画館を出てからずっと楽しそうにはしゃいでいるから、咲良も笑顔を作って答えた。

店に入り、向かい合わせに座ってメニューを広げた。

「なに食おうかなー」

「私、カルボナーラ」

「決めるの早いな」

目の前の涼がメニューから顔を上げて言った。

「これは？ 当店おすすめのかぼちゃのタルト」

「夕食だぜ。そんなに腹いっぱいになんねーよ」

そう言いながら涼は、おいしそうだなって笑った。

結局、涼も咲良と同じものを注文し、涼はデザートにタルトをひとつ頼んだ。

パスタを食べ終える頃に運ばれて来たタルトは、白いクリームがふわふわした感じでのっぺい、すごく美味しそうだ。

フォークを使って涼がタルトを半分に切っているのをじっと見ていると、その半分を取り皿に載せて、咲良の前に置いて言った。

「半分ずつ食おう」

「食べたかったんでしょ？ いいよ、全部食べて」

「いいから食えって」

無理やり押し付けられたタルトだったが、口に入れるととてもふんわりと柔らかで、とろけそうに美味しくて、幸せな気分になった。「おいしい」

「そっか。良かった」

目の前に座る涼の顔も、いつもよりも柔らかかな笑顔になった。ほんのちよつとだけど、こういうのもいいかもしれないと咲良は思った。

「人間の三大欲って何か知ってる？」

店を出て、一階に下りるためにエレベーターを待っているとき、いきなり涼が変なことを質問してきた。

咲良は答えず、怪訝な目を涼に向ける。

「一つ目が食欲。コレは今、満たされただろ？」

で、二つ目が睡眠欲。やっぱり満腹になったら眠くなるんだ。そして三つ目が何だと思う？」

咲良の反応を窺うような目で、涼が顔をのぞきこんでくる。

「食欲、睡眠欲と来れば最後は……」

ホテルとか行くなよって言った陸の言葉が頭をよぎった。

「わかった？」

面白そうに涼が聞いてくる。

「涼くん、誘ってるの？」

そう言ったら涼は満面の笑みを浮かべた。

「やっぱり咲良はいいな。男を良く理解してくれてる。さすが大学生、大人の女って感じ」

そんな言葉でほめられても嬉しくない。

年上だからって簡単に抱かせてもらええると思ってるのかもしれない。

「私はまだ大人じゃないよ。未成年だし」

「えー。けど、17のオレに比べれば大人だよ」

「比べればね。でもたった二つだし、自分ではまだまだ子供だと思ってるもん。悪いけど涼くんの性欲、満たしてあげられないから帰るね」

ちよつと開いたエレベーターの中に、咲良はさっさと足を踏み入

れる。

「ええーっ。帰るのかよー。けど、まあいつか、先は長いんだし。じゃ、送るよ」

不満そうな声を出しながらも、それ以上しつこく誘ってはこなくて、ちゃんとアパートの前まで咲良を送ってくれた。

「ありがとう、ここでいいから」

じゃあね、と言って部屋の鍵を開けようとした咲良の肩を、涼が後ろからつかんだ。

「部屋に入れてくんねーの？」

「……入りたいの？」

「コーヒーくらい飲んでって、とか言えよ」

ドラマの見過ぎなんじゃない？

「悪いけど、一人暮らしじゃないから勝手に他人を入れられないの」

「嘘、マジで？ てつきり咲良って一人で住んでるとばかり」

「残念でした。そう言う事だから、またね」

笑顔でヒラヒラと手を振ったとき、向こうのほうから陸が帰ってくるのが見えた。

「あ、陸！」

「え……」

涼が振り向いたと同時に、陸もこっちに気付いたようだ。

「一緒に住んでるって、まさかあいつ？」

涼は咲良を振り返ると、怪訝そうに聞いた。

「うん。同じ大学の先輩。陸ってゆーの」

「男と住んでるのか？」

涼の顔つきが見る間に曇ってゆくのを、目の前でヤバイと感じながらも、咲良は言葉を止められなかった。

「それがどうかした？」

「どうかって、なんだよそれ」

涼の戸惑いが手に取るようにわかる。

そうしている間に、陸が二人のそばまで辿り着いた。

「例の彼氏？」

「うん。桜井涼くん。送ってもらったの」

「ふーん。カッコイイ彼氏じゃん。まあうまくやってくれ」

言いながら陸は横目でチラッと涼を見ると、先に部屋に入っていた。

「嫌だな……」

涼がつぶやいた。

「え？」

「嫌だつて言っただ。咲良が男と一緒に住んでるなんて。好きな女が他の男と一緒になんて、すっげー嫌だっ」

涼は大声で怒鳴るように言った。

「嫌なら別れればいいじゃない。解消する気ないよ、陸との生活」
無言で睨みつけるように咲良を見る涼に、負けそうになった。

「な、何よっ！」

咲良も負けずに、大声で怒鳴り返す。

「何よじゃねーだろっ、オレよりアイツとの生活のほうが大事だつて言うのかっ！ オレは咲良の彼氏じゃねーのかよ。何だよその態度。はつきり言ってバカにされてる気がする。頭にくるんだよっ！」

一気に怒鳴りつけられて、咲良は言葉に詰まった。

涼の言いたいことはわかる。

でも彼氏だと言っても、何となく付き合っただけで陸との生活を犠牲にしてまで続けたいとは思わないのも事実だ。

もしかしたら本当に涼のこと、バカにしているのかもしれない。

「今日は帰る……。けど絶対嫌だからな。こんなの絶対認めねー！

絶対別れないからなっ」

そう言い残して涼は帰って行った。

「あーあ、疲れたよ〜」

部屋に入るなり、咲良はベッドに倒れこんだ。

「なんか揉めてたみたいだな。って無理ねーか。初日でいきなり同居がバレたんだから、彼氏もキツかったよな」

涼に同情するような言い方をしたのに、咲良はムカツとなった。

「何よ！ 私だってキツイんだからね。疲れた疲れた。陸、マツサージして？」

咲良はベッドに仰向けに寝返った。

「さっきの今で、良くそんなことが言えるよな」

呆れたように陸が言った。

「さっきのって？ そんなことって何よー」

冗談っぽく咲良は言ったが、陸の反応は違った。

「どこマツサージして欲しいんだよ」

意外にも陸の顔が真剣なので、咲良も笑っている場合じゃないかもしれないと悟った。

「どこでも……陸の好きなところ、触っていいよ」

陸は一瞬、目を大きく見開いたけれど、すぐにさっきよりもっと真面目な顔つきになって、無言で咲良のわき腹あたりに手を触れた。

「ひやははっ！ やめてー」

くすぐったくて身をよじった。

「もうっ！ 陸がくすぐるなら、私だってこうしてやるー」

咲良も陸の身体中をくすぐりだした。

「うわっ、やめろって…ハハッ、ちよっ……」

二人で、シーツをグシャグシャにしながら暴れた。

「ああっ、もうダメって……やめっって降参」

ついに陸が涙を流しながら降参した。

「もう降参なのー、つまんないの」

「ってゆーか、咲良……おりてくれる？」

ハアハア息を乱しながら、陸が咲良を見上げる。

ふと気が付くと、咲良は仰向けに寝た陸の身体に、またがるような格好で座っていた。

「あ、ごめん」

咲良が陸から放れようとした瞬間、

「咲良……」

ふいに陸が、咲良の腕をつかんだ。

下りろと言ったのは陸なのに、どうして腕をつかまれるんだろうと、首をかしげて陸を見ていると、そのまま腕を引っ張るようにして……。

「きゃっ」

ベッドの上に倒された。

「油断大敵」

今度は陸が咲良の上に乗った。

「ああん、もう。重いよ」

咲良は陸の体を両手で押しつけようとしたが、一瞬早く陸に手首をつかまれ、シートにギュッと押し付けられた。

「陸？」

咲良を見下ろす陸の表情は、天井に取り付けた明かりが逆光になってよく見えない。

「陸……痛いよ」

咲良は急に陸が怖くなった。

強く握られた手首。そのせいか指先がじんじんとしびれてきた。

「……俺だつて……ちゃんと男なんだ。そんな風に無防備に体……さらされたら……」

咲良から目をそらし、陸は唇をかんでいる。そしてゆっくりと目を閉じると、ため息とともにつかんだ手首を放してくれた。

咲良を解放した陸は、テーブルのうえからタバコとライターを手にとって、ポケットに入れた。

「ちよつと……頭冷やしてくる」

振り向かないまま告げてから、陸は部屋を出て行った。

咲良を押さえていた陸はいなくて、自由に動けるはずの体が何故か動かない。

「何…これ」

陸の言葉を頭の中で反芻した。

「わかってるよ。陸が男ってことくらい」

そんなの改めて教えてくれなくても、十分承知している。

無防備に言って言ったって裸さらした訳でもないのに、あんな風に怒られるのはふに落ちない。

「そっか。欲求不満なのかも」

ずっと彼女と一緒に住んでいた男が、別れて急に一人になったんだ。

そこに女がいれば、血迷ってしまってもしょうがないのかもしれない。

咲良は自分に魅力がないのかと思っていた。だから陸は一緒に住んでも何も起こらないんだと思いこんでいた。

「私でも女に見てもらえたってことよね？」

でも、陸は出来た男だからちゃんと警告してくれたんだ。

「やっぱり陸っていい人だな」

涼が考えるようなことは起こらない。

だから陸との生活を解消なんかしなくてもいい。

そう考えたら、さっき怖いと一瞬思った陸のことも、もう怖くないと思えた。

第4話に続く

第四話

涼から呼ばれて、咲良は涼と近所の公園で会った。

昨日、陸とちよつと気まづくなつたことが気になっていて、涼の言葉が頭に入つてこない。

「だからさ、嫌だつてこと」

「……あ、ごめん。もう一回言つてくれる？」

タバコを吸いに外へ出て行つた陸を、咲良は迎えに外に出た。

けれど陸は目を背けたままだった。

咲良について部屋に入つてくれたものの、話もしないまま寝てしまつて、そして朝も陸は黙つたままだった。咲良から話しかければ答えてくれたのかもしれないが、話しかけられる雰囲気じゃなかった。

今日帰つたら、いつもの陸に戻つてるといいな。

「つて、聞いてんのかよつ、咲良！」

「あ……」

ダメだ。

涼の話が全く聞けない。

「ごめん。ちよつと悩みが……」

「悩み？ どうしたんだよ、悩みがあるなら聞かよ」

「ううん。お……女の秘密の悩みだから、涼くんには言えない」

咄嗟についた嘘だけど、涼は「そつか」なんてうなずいて納得してくれた。

咲良は気を取り直して、涼に言った。

「もう一回言つて？」

「ああ」

二人で並んでベンチに座っていた。

咲良の右手を、涼がそつと握る。

咲良もチラツと涼の横顔をうかがつた。

「だから、嫌なんだ。咲良が男と住んでるの」
「うん……」

その話だよ、やっぱり。

「嫌なんだけど、咲良が同居を解消するならオレと別れるって言ったじゃん？ だから、別れられるくらいならオレ…ガマンする。せつかく付き合えたのに、簡単には手放せない」

「いいの？」

「いいよ。あいつとは何でもないんだろ？ ただの同居人っただけだろ？」

涼が咲良の顔を覗き込む。

そこまでして自分と付き合っていたいんだろ？ と咲良は思った。涼のことを好きだとまだ思っていないのに、それでもいいのだろうか。

「一緒にいたいんだ、咲良と」

真摯な目で訴えられる。

「私……中途半端な気持ちで、涼くんの告白に応じた。取り敢えずでいいって言ったから、うなずいたんだよね」

土下座なんかされたから、しょうがなく。

「こんな形だけでいいの？」

「いいんだよっ」

涼は、咲良を繋ぎ止めようと必死になっている。

涼の気持ちはわかる。

「友達だつて、一緒に遊んだり過ごしたり出来るんじゃない？ 一緒にいて、私が涼くんを好きって思えたら改めて付き合おうよ」

「ヤダよっ！」

涼は子供のように大きく首を横に振って、唇をぎゅっと噛んで咲良を凝視する。

「友達なんか言ったら、咲良他に彼氏出来るかもしんねーじゃん。陸つてヤツと一緒に住んでるんだし、アイツのほうが好きになる可能性だつてあると思う。そしたらオレの入るスキなんかなくなる。」

一緒に住んでるヤツに勝てる自信ねーよ。嫌だからな、別れない。絶対に別れないんだからなっ！」

涼は一気に自分の気持ちを告白してしまうと、脱力したようにな垂れた。

形だけでも恋人同士でいたいんだろうか。

付き合っている相手がいたって、他の人に心が奪われることだってあるのに。

「咲良、本気で好きなんだよ？ 咲良がファミレスにバイトに来た瞬間から。やっとここまで来れたのに、簡単にオレのこと捨てるなよ」

懇願するように言われると、涼に流されそうになる。

「他に好きなヤツがないなら。もう少し傍にいさせて欲しいんだ。オレ、頑張るからさ。咲良の理想の男になるから、だから……」

涼にだってプライドがあるだろうって思う。なのに、情けないくらい咲良に縋ってくる。

「うん。わかった」

また断れなかった。

また流されるように、咲良は涼と続けることを約束した。

「オレさ、ダメなところばかりかもしれないけど、頑張るからなっ」出来るだけ、涼を見てあげようと思った。涼のいいところをたくさん見つけていけば、きっと好きになれる。

「あれ？ 陸、いないの？」

帰った部屋は、真っ暗だ。

遅くなるとは聞いていない。と言うより何も話していないんだっ

た。

帰りに夕食の買い物をしてきた。スーパーの袋をテーブルの上に置くと、咲良は中から買ってきた

品物を取り出す。

今日のメニューは、ちらし寿司と茶碗蒸しだ。

「まずは茶碗蒸しのダシをとるか」

咲良は食品棚から椎茸を取り出し、水を入れたボウルに入れる。米を研いで、炊飯器にセットしてから錦糸卵を焼いた。

そうしているうちに、陸が電話をかけてきた。

『悪い。バイトの仲間に誘われてさ、今日、飲み会になった』

『ええーっ、もう用意してるのに！ もうせっかく……』

『しょうがねーじゃん。ちゃんと連絡したからな』

「もうっ、り」

陸は咲良の言葉を遮るようにして、電話を切ってしまった。

「なによ。電話するなら、もっと早くして欲しいよ」

でも、連絡くれるだけ、いいのかもしれないと思った。

それでも作りかけた夕食は、自分のためだけには、もう作る気がしなくなった。

作りかけの料理をそのままにして、咲良はベッドに潜った。

目をつぶっていたら、いつのまにか眠ってしまったらしく、玄関のドアが開く音で目が覚めた。

「たらいまゝって。もう寝てるって」

酔いの回った口調で陸は言つと、咲良の寝ているベッドに入ってきた。

「ちよつと陸！ 陸はあつちでしょー」

「いいじゃん一緒に寝よ」

「陸！」

酔っ払った陸を見るのは初めてじゃないけれど、こんな風に絡んでくることは今までなかった。

「咲良ちゃん……」

陸に体を抱きしめられる。

「や……陸、放してっ」

両手でぐいっつ押し退けたら、陸がベッドから落ちた。

「うん……」

落ちたままの体勢で、陸は眠ってしまったようだった。

「もう。しょうがないな」

咲良は陸のふとんを敷いてから、陸を運んだ。

「あーん。重いっ」

引きずるようにしてやっと陸を寝かせると、そのままにしていた作りかけの料理を片付けた。

翌朝、咲良は朝食を作らなかった。

「咲良、あの、ごめん」

朝食の用意されていないテーブルを見ながら、陸が謝った。

咲良が怒っていると思っただらう。

怒っているわけではなかったけれど、素直に許すのも癪に障る。

「怒ってるんだよな？ 昨日のこと」

「ふーんだ。知らない」

咲良は陸と目を合わせずに、ふんつと顔をそむける。

「ホント悪かったよ。機嫌直せよ……な？」

「酔っ払って抱きついてきたくせに！」

「ええっ、嘘だろ。覚えてない。けど、それだけだろ？ まさかそ

れ以上のことは……」

「さあね。早く学校行きなさいよ！」

怒っていると言っより、ちよつとした反抗心。照れ隠しだ。

「咲良は？」

「今日はお休みするのよ。陸のせいで寝不足なの。頭が痛いんだもん」

咲良は言っつて、ベッドに直行した。

きつと陸は「大丈夫か？」って心配してくれるはず。

「そっか。じゃあ俺行くな。ホントごめんな？」

なのに陸は、咲良の期待を裏切っつて学校へ行っつてしまった。

「その後、どう？」

「その後って？」

「一緒に住んでるんだろ？ 陸と。もうやられちゃった？」

「やだな、先輩。すぐそっちの方に考えちゃって」

「だって陸は男だぜ？ 男と女がずっと一緒に暮らしててさ、何も無いなんて信じられない」

先輩は、「で、真相は？」と再び咲良に聞いた。

「何もされてません。竜輝先輩、考えすぎです」

「そうか？ だったらアイツ、珍しいヤツだな。どっか変なんじゃないか？」

「変で悪かったな」

急に後ろから声がして振り返ると、陸が目を眇めて二人を見ている。

「勝手に人の噂してんなよ」

陸は不機嫌そうにそう言うつと、咲良と竜輝を追い越して行ってしまった。

「あーあ、怒らせちゃったな」

竜輝が言ったけれど、陸が怒ったのはたぶん今のだけが理由ではないだろう。

「じゃ、咲良ちゃん。急ぐからまたね」

竜輝は言っつて、サークルの教室とは反対方向に歩いて行つた。

竜輝を見送つて、サークルの教室のほうを見た。

「はあ。会つのもツライかも」

今、陸は咲良の顔を一度も見なかった。視線はずつと隣にいた竜輝に注がれていた。

わざと避けられた。

そんな気がした。

きつと朝のメールのことを怒っているに違いない。

でも、どうせ帰つたらあの狭いワンルームで、嫌でも顔を合わせるのだ。早いうちに仲直りしよう。

そう決意して、咲良は教室に向かった。

教室をのぞくと、やはり陸のほかには誰も来ていなかった。相変わらず、みんな不真面目だ。

陸は椅子に座って、熱心に何かの本を読んでいる。きつと宇宙の本に決まっている。

咲良は少しずつ陸に近づいた。

本に熱中してるのか、陸は咲良に気付かないのか、本から顔を上げてはくれない。

無視してるのかもしれない。

咲良は思っつて、陸の背後まで辿り着くと、陸の読んでいる本をそつとのぞきこむ。そして書いてあることを声に出して読んでみた。

「木星は……引力が、すごく、強い」

後ろにいる咲良に気付いてないはずがないのに、陸は振り向いてもくれない。

やっぱり無視してるんだ。

どうせ、誰もいないんだ。

「陸っ」

咲良は思い切っつて、陸の背中におぶさるようにして抱きついた。

「うわあっ！ 何だよいきなりっ」

陸は余程驚いたのか、咲良の体を乱暴に振り払った。

「やっ、ひどい仕打ち」

冗談っぽく咲良は言っつたが、内心ひどく動揺していた。

陸に払われたショックで、涙が出そうになっつてしまった。

「あ……いや、そういうつもりじゃなくて。…泣くなよ」

「泣いてないもん」

涙が頬を伝っつているんだ。泣いていることはわかっつている。だけど、認めたくなくて、わざと強がった。

「泣いてるだろっ。何なんだよもう……」

はあっつと陸が大きなため息をついたのに、またさらに落ち込んだ。「いいよ。そんなに怒るなら帰る！ 先に帰るからねっ、バイバイ」

「待てよ！」

陸が咲良の腕をつかんで引き止める。

「ったくもう。咲良が怒ってたんじゃねーのかよ。怒ったり、怒らせるようなことしたり、泣いたり。咲良ってそんなヤツだった？

なんか最近の咲良、ちっともわかんねー」

「わかんないのは、陸だよ」

「は？ 朝っぱらから変なメール送りつけてくるし、わかんねーのは咲良だろ」

呆れたように陸が言う。

「だから無視したの？」

「休むって言ったくせに学校に来てるし……」

「来ちゃいけないの？ だいたい先に陸が悪いことしたんだからね」
「なんだよ」

「飲み会なんかに行つたし、抱きついたしっ」

「酔って覚えてねーんだよ」

「覚えてなかったら何してもいいのっ！」

「咲良…、本当に覚えてないんだ」

陸が申し訳なさそうに、息を吐いた。

「ごめん。覚えてないとは言つても、そんなに怒るってことは、相当嫌な思いをさせちゃったんだろ？ 俺、咲良に何した？」

「何って……」

「言えない。だってそれ以上のことは何もされていないんだから。」

自分が望んだように陸が行動しなかっただけで、自分勝手に怒ってるんだ。

「もういいよ。許すよ、陸」

「最悪だ。許すだなんて、傲慢な言い方をして、すべて陸が悪いかのように責任転嫁している。」

「言えないようなことを、俺は咲良にしてしまったんだな」

「……陸」

「違うよ、そうじゃない。」

そう言わなきゃいけないのに、言葉が出てこない。

「一緒にいたら、またこんなことが起こらないとも限らないよな。ちよつどいい機会かもな。俺、咲良のそこ出てくよ」

じゃあまた明日ねって言うように簡単に、陸はあっさりと咲良に告げる。

「やだ。出てくって何よ。出て行ったって、行くところあるの?」

「あるよ」

「ないから、うちにいたんじゃないの?」

「咲良の好意に甘えてただけだ。もともと金がたまるまでのつなぎのつもりだったんだ。ちよつと予定より早くなっただけだし、竜輝のそこだつて泊めてもらえるだろうし。大丈夫、心配すんな」

陸は咲良の頭をポンツと軽く叩く。

「咲良は彼氏、安心させてやれよな」

じゃあな、と言つて、陸は咲良を残して教室を出て行った。

「これで……終わりなのかな」

あまりにあっけないサヨナラだ。

咲良はそこにあった椅子に、倒れこむようにして座った。

五話に続く

第五話

陸がいなくなった部屋は、とても静かで、とても寂しかった。「快適だなー。陸のイビキって時々すつごいうるさくて迷惑だったんだもん」

大きな声で、自分自身に言い聞かせるようにして言った。今まで、そこに置きっぱなしだった陸の荷物がなくなった。

「荷物、散らかって邪魔だったもんっ」

すつきりと片付いて良かったよ。

「良かった良かったー」

笑おうとするのに、笑えなかった。

次の日、サークルの教室をのぞくと、陸はちゃんとした。

「今日もひとりで活動してるの？」

咲良が声をかけると、陸は気付いて笑顔をくれた。

「ハハッ、相変わらずだよ」

咲良は陸の隣に座ると、陸が読んでいた本を見た。

「何の本、読んでるの？」

「宇宙の中における地球の位置の謎」

「謎？」

「そう。宇宙の中にはたくさん星があるだろ？ 近いところでは火星とか金星。けど、どの星も生物がすむには条件が悪くて無理なんだ。地球だけが生物の住める唯一の星なんだよな」

咲良はうなずきながら聞いた。

「生物が生きていくのに、絶対必要なのが水なんだ。地球の海と陸の割合って」

陸の話は、それからかなり長く続いたけれど、本当に良く知って

いるし、語るときの陸の目は、キラキラしている。

宇宙が本当に好きなんだなあ、と思ったら宇宙にちょっとだけ嫉妬した。

「本当に謎だよ。地球だけが特別な星で、そこに私たちが住んでるのってスゴイよね」

「さすが咲良。俺の話についてこれるのって、咲良だけだ」

陸に喜んでもらったことが、すごく嬉しかった。

「昨日、つい竜輝に同じように話してたんだけど、もういいよーとか途中で言われてさ、がっかりしてたんだ」

「そっか。じゃあ戻ってくればいいよ。いつでも話を聞いてあげるよ」

「え……」

陸は目を瞬いた。

「昨日、淋しかった。陸のいない部屋は広すぎて、眠れなかった。

睡眠不足になっちゃうよ。帰って来てよ、陸」

「何言ってるんだ。彼氏に来てもらえばいいだろ」

そっけなく、陸は言った。

陸が出て行かなければならない状況を作ったのは、咲良自身だったのだ。

咲良が、涼と付き合い合わなければ。

咲良が酔っ払った陸のしたことを責めなければ。

そして、あんなメールを送らなければ、まだ陸は部屋にとどまってくれていたかもしれないのだ。

「そのうち慣れるだろ？ もともと一人で住んでたんだし。そのうち俺なんかいないのが、当たり前になる」

口を開いたら、泣いてしまっただけじゃなかった。

咲良は、陸にひとこと「じゃあね」と告げると、逃げるように教室を飛び出した。

振り返っても陸は追いかけては来ない。

その日以来、咲良はサークルに顔を出すのをやめた。

陸が出て行ったことを話したら、涼は喜んだ。

けれど、そんな涼を見て、咲良は腹が立ってしょうがなかった。

涼と付き合わなかったら……。

恨みがましく、涼を見てしまう。

「咲良。あのさ、オレたちそろそろ……」

咲良の部屋に、涼が遊びに来ていた。

彼氏に来てもらえばいいって言った陸の言うとおり、呼んでみたのだ。淋しさが埋まると思ったからだ。

ベッドに横並びで座っている。

涼が何を言いたいのか、咲良にはわかってる。

「咲良」

涼の腕が肩に回る。その手に力がこもったと思ったら、もう涼に押し倒されていた。

見上げる涼の顔は、咲良に優しく微笑みかけてくれている。

「好き……さくら」

涼の唇が触れる瞬間、そっと目を閉じた。

初めて涼に抱かれたけれど、ちっとも集中出来なかった。

それ以来、会うたびに涼は咲良の身体を求めた。

これが、涼の言う「付き合う」と言うことなんだろうか。

咲良はそれに大人しく応じてはいたが、心はいつも可笑しいくらい冷めていた。

「咲良。あの、慣れてねーのかもしれないけど。気持ちよくない？」

ベッドの中で、ふいに涼が言った。

「声とか、もつと出して？」

「……出せない」

あれこれ要求されても出来ない。

「そっか。わかった。ごめん、変なこと言っつて」

涼の気持ちに、ちゃんと答えてあげられない自分。

まだ、咲良は涼を好きになれていないんだと悟った。

「私も……ごめん」

「咲良が謝らなくてもいいんだ。オレが下手なんだから」

もつと研究するからな、と言われたつて困る。

それしか研究することがないのかつて思った。

そんなことよりも、もつと話をたくさんして、お互いのことを分
かり合つて……。

じゃなきゃ、いつまでたつても、気持ちが悪くならない気がした。

ちょうどその時期、バイトのシフトが変わつて、更衣室で涼と会
う機会がなくなった。

誘われれば応じるけれど、自分から会いたいとは思わなかった。

しかも会うたびに気持ちが悪く冷めてゆくのだ。

もう、終わりにしたい。

そう思いながら、涼に言えないまま1ヶ月が過ぎた。

「最近ずつと具合、悪そうだな」

咲良の部屋に来ている涼が、ベッドに寝たままの咲良を心配して
くれる。

それが、ひどく重荷だった。

「それつて体の具合が悪いんじゃないかと、精神的なストレスじゃな
いのか？」

「……頭が痛い」

「そうか？ いつも頭が痛くなつたり、胃が痛くなつたりさ、すつ
げーツラそうだし、オレといるのが……嫌？」

涼といなきゃいけないつて、言い聞かせていた。

好きにならなきゃいけないって、頑張っていた。

会いたくないのに、我慢して会っていた。

それが精神的に自分を追い詰めているなんて、咲良は思っていなかった。

「誘うのはいつもオレのほうだし、電話だってオレからばっかだし。会ってもこんな風なんだ。咲良がオレを好きじゃないってことくらい、わかるよ。最初から今日まで、咲良はオレが一度も好きじゃなかったんだっ」

「怒鳴らないでよ。頭が痛いって言ったでしょ……」

頭を抱えて、ベッドにもぐりこんだ。

「嫌なら嫌だって言ってくれていいよ」

静かな口調で涼は言う。

「……嫌」

聞こえないくらい小さな声で言った。

「聞こえるように……言えよ」

咲良はゆっくり体を起こした。

涼を見ると、涼も咲良をじっと見ている。

寂しそうな目。それでいて、キツイ眼差しだ。

「嫌いな。嫌い。涼くんなんか大嫌いつ！」

こんな言葉が自分の口から出るなんて、咲良は驚いた。言われた涼のほうも、大きく目を見開いたまま、しばらくの間何も言えないようだった。

「……んだよ、それ……」

震えるような声だ。

「涼くんのせいで……陸が出て行ったの。涼くんと付き合ってたなかったら、陸は今もここにいたの」

涼はぼつ然と咲良の顔を見ている。何か言おうとしているようだけど、きつと言葉も出ないんだろう。

「嫌なんだもん。会いたくなかった。しょうがないじゃん。それでも涼くんが、会いたい会いたいわって言うから、無理して会ってあげ

てたのに」

「そんなに嫌われてるとは……思わなかったな」

怒っているような、泣きそうな。そんな顔を涼はした。

「私もこんな嫌いになるとは思わなかった。涼くんと付き合ってたかったら、こんな嫌な自分にならなかつた」

「咲良は、全部オレが悪いって言うのか？」

「そうよ。涼くんに縛られてるせいで、無駄に時間を過ごしたじゃない。どうしてくれるのよ！ 返してよ。アンタと過ごした時間。1カ月を返してよっ！」

咲良は、自分でもわかってた。

言っていることはめっちゃくちゃだし、涼を傷つけていることもわかってた。

けれど言葉を止められなかつた。

「もういいよ。それ以上聞きたくねーって。ひどいよ、咲良。そんなこと言うなんて、信じらんねーよ」

涼は咲良に背を向けた。その背中に向かって、咲良はさらに言葉をぶつける。

「聞きたくないなら、帰ればいいじゃん」

「わかつたよ、帰るよ。そしてもう絶対会わねー。バイトも辞めてやるよっ。咲良とは一切関係ないからな、こっちこそおまえなんか大嫌いだっ！ 別れてやるから、陸ってヤツとまた一緒に……暮らせばっ、いいだろっ」

最後のほうは涙声になっていた。

涼は咲良に顔を見せないまま、部屋を出て行った。

「……ごめんなさっ……」

いなくなった涼にはもう届かないけれど、ドアに向かって咲良は謝った。

涼を傷つけた。

会いたいと言ってくれた涼に、好きだと言ってくれた涼に応えてあげるのが、良い事だと思っていた。

涼は楽しそうにしていたし、間違っただけだと思っただ。

本当に、楽しかったんだろっか。

涼はいつも笑っていた。でも、それは心からのものだったんだろっか。

もしかして、涼も無理していた？

咲良の顔を窺って、無理して明るく振舞ってくれていたんじゃないだろうっか。

でも……。

だけど、やっぱり好きじゃないのだ。

どうして、こんなに陸が出て行ったことに拘っているのか。どうして陸にそっけなくされて、傷ついてしまったのか。

「私……陸がいいんだ」

好きなんだ、と思った。

陸の話があんなに面白いと思ったのは、宇宙が好きなのはもちろんだけど、きっとそれ以上に陸が好きだからなのだ。

いつから？

……そんなのどうでもいい。

いつからか知らないけれど、咲良は陸が好きだと気付いた。

第六話に続く

宇宙いっぱいの愛

第五話（後書き）

少しでも楽しんでいただけたでしょうか？

もう少し続きますので、また読んで下さいね。

できればコメントや評価をいただけると、嬉しく思います。

第六話（前書き）

陸への気持ちに気付いた咲良。
咲良が次にとる行動は？

宇宙いっぱいの愛

第六話

気持ちに気付いたら、陸に会いたくてたまらなくなつた。

「ただ、この一ヶ月。まともに陸を見ていなかったし、会話など一言もしていない。」

サークルにもご無沙汰だった。

会つのは緊張するけれど、会いたい気持ちのほうが勝っていた。

「よし。行こう！」

決心して、咲良は一ヶ月ぶりにサークルに顔を出した。

「あれ、竜輝先輩だけですか？」

「てっきり陸がいるものだと思っていたのに、珍しく竜輝がひとりで座っている。」

「おー、咲良ちゃん。久しぶり」

「こんにちは」

「今までなにやってたんだよ」

「彼氏と……ちょっと修羅場になつて。でも結果、別れましたけどね」

咲良は正直に、笑顔を作つて竜輝に知らせた。

「そうか、別れたのか。陸も咲良ちゃんがサークルに来なくなつて心配してたぜ」

「心配かけちゃったんですね。悪かったな」

「今、俺さあ、陸と一緒に住んでるだろ？ 何かアイツ落ち込んでるみたいだからさ、こうして俺もサークル活動をやつてやるわけだ」

「陸のためですか？」

「そうそう。もともとアイツに無理やり勧誘されたようなもんだろ？ 宇宙って正直あんまり興味ないんだ」

「そうなんだ。」

「陸ならもうすぐ戻ってくるだろ。ジュース買いに行つてただけだ」

から」

「会うの久しぶりだから緊張しちゃいますね」

「ふーん。あ、そうだ。隠れて脅かしてやれば？ 陸のこと」

竜輝は悪戯っぽく笑うと、咲良の返事も聞かずに、教室の隅にある掃除道具入れに咲良を押し込んだ。

「やだ、先輩。こんなところに……」

「いいからいいから。あ、帰ってきたっ」

教室のドアが開くのと同時に、竜輝が掃除道具入れのドアを閉めた。

「やっぱ、今日も誰も来ないんだな」

陸の声がした。

「そうだな。サークル活動の意味ないよ。陸は個人的にいろいろ研究してるけどさ、一人じゃ孤独だよな、やっぱ咲良ちゃんも一緒にいいだろ」

「咲良？」

「そうそう。最近彼女、来ねーよな」

ここにいることを知っているくせに、竜輝はとぼけている。

「星の研究なんかより、彼氏と遊ぶほうが楽しいんだろ」

そっけなく陸が言った。

「気になってるくせに。そんな何でもない風を装うな」

「何言ってるんだ。変だぞ、今日の竜輝」

咲良は出てゆくタイミングをつかめないまま、二人の会話を黙って聞いていた。

「俺さあ、陸の正直な気持ちを知りたいんだよな」

「正直な気持ちってなんだよ」

明らかに不審そうな陸の口調。

「実はさ、そろそろハッキリしたいんだよな」

「ハッキリって……何だよ」

「陸にも誰にも秘密だったんだけど、俺、咲良ちゃんが好きなんだ」

「は……今、何て言った？」

「だから、俺は咲良ちゃんが好きだって言ったんだ」
咲良は驚いた。

思わず声を出しそうになって、慌てて口を手で塞ぐ。

「好きって……おまえ本気なのか？」

「本当だ。だから気になるんだよ。陸が咲良ちゃんを好きだったら、俺も考えるしな」

「あいつ、彼氏いるぞ」

「ああ、それなら大丈夫。もう別れたって聞いたから。だから告白しようかなって思ったんだ。失恋して落ち込んでる咲良ちゃんの心のスキマにつけこむつもり」

「なっ……」

「けど、陸の立場もあるし、一応了解取るべきかなって思ったもんだから。で、本心はどうなんだ？」

俺と陸はライバルなのか？ と、竜輝は言った。

「……なんだよ、勝手に告白すればいいだろ」

陸の言葉に、咲良は胸が痛んだ。

陸は自分のことを、どうでもいいと思ってる。

竜輝と付き合ったって、別にどうってことないんだって、思い知らされた気がした。

「そっか。わかった。じゃあ、勝手にさせてもらう」

竜輝の声が近づいて来たかと思ったら、いきなりドアが開けられた。
た。

「聞いていたとおりだ。咲良ちゃんの気持ちを聞かせてもらおうかな」

目を上げると、咲良を見下ろす竜輝とバッチリ目が合った。

「好きなんだ、咲良ちゃん」

声は真剣だけど、目が笑ってる。

もしかして、冗談？ 演技だろうか。

「さ、出ておいで」

竜輝に腕を引っ張られて、咲良は掃除道具入れから外に出る。

狭いところにずっといたし、掃除道具の匂いに参っていたから、外の空気が新鮮に感じる。

ふと見ると、陸が啞然とした顔をして、こっちを見ていた。

「陸……」

「な、何でいるんだよっ！」

「ごめん。まさか、こんな展開になるなんて……」

「俺が隠れてるって言ったんだよ」

竜輝が咲良の言葉を引き継いだ。

「おまつ、知ってて俺に気持ちを言わせようとしてっ」

陸は動揺しているようだ。

「そうだよ。けど陸は俺に勝手に告白すればいいって言った。その言葉、撤回するなら告白は待ってやってもいいけど？」

「撤回……って……」

陸は唇をぎゅゅと噛んだ。

「いいのか？ 陸は俺と咲良ちゃんを応援してくれんの？ 咲良ちゃんも誰と付き合おうが、どうでもいいわけ？」

竜輝は、陸を煽っているようだ。

でも、陸は黙ったままで、何も言ってはくれない。

ヤケクソで竜輝の告白を受けてしまおうかと思った。けれど、ダメだ。

もし、竜輝が真剣に思ってくれているなら、軽々しく受けてはいけない。

すでに涼を傷つけてしまっているんだ。

相手に気持ちがない以上、簡単に応じてしまっただけじゃないのだ。

「咲良ちゃん、陸は何も言わないようだよ。どうする？ 俺と付き合おう？」

「あ、ごめんなさい」

咲良は頭を深く下げた。

「好きな人がいるんです。彼とダメになったのもその人が忘れられないからなんですっ」

しばらくの間、誰も言葉を発しなかった。

ゆっくり顔を上げてみると、笑顔の竜輝が咲良を見下ろしていた。

「竜輝先輩……」

「いいよ。知ってたから」

竜輝はサラリと言つと、咲良の頭を軽く撫でた。

「じゃ、今度は咲良ちゃんがそいつに告白する番だな。大丈夫、きつとうまくいくよ」

じゃあ頑張つて、と竜輝は言い残して教室を出て行った。

咲良は、ゆっくり陸を振り返る。

「あ、ああ、俺も帰ろうかな」

頭をぐしゃぐしゃかき混ぜながら、陸も出て行った。

教室にひとり取り残された咲良は、深いため息を落とす。

他に好きな人がいるなんて言ったことを後悔していた。

アレじゃあ陸が誤解してしまう。

ちゃんと、陸が好きだつて、どうして言わなかったんだろう。

でも、言ったところでどうにもならないだろう。陸は竜輝の告白を止めなかった。

咲良に構いもせず、自分も出て行ったんだ。

せつかく涼と別れたのに、そんなことは何も関係なかったつてことだ。

告いわなくて良かったのかもしれない。

「はあ……」

咲良はもうひとつため息をつくつと、帰るために教室を出た。

中庭を抜けると、竜輝と出会った。

「あれ？ 咲良ちゃんひとり？」

不思議そうに竜輝に聞かれた。

「陸は？」

「帰りました。竜輝先輩が出てつた後すぐに」

「そっか。じゃあ、告白しなかったんだ？」

「え……」

「咲良ちゃんが好きなものって、陸だろ？」

「いつ、気持ちが悪くたんだろ。」

「どうして……」

「そんなの最初からわかってたよ。咲良ちゃんの陸を見る目は、恋する目だった」

「嘘、最初からだなんてそんな……」

「そんなはずはないと思う。自分の気持ちに気付いたのは最近のことだ。最初からなんて、絶対違う。」

「嫌いな男と同居しないだろ？ 嫌いな男のあんな話、熱心に聞かないだろ」

「それは、陸がいい人だと思ったからだ。それに宇宙の話は咲良も興味があった。」

「ま、いつからなんて、この際どうでもいいよな。でもなー、陸のやつ、逃げるなんて根性なしだな」

「あの、先輩」

「咲良は言いくそくに口を開く。」

「竜輝先輩は……私のこと」

「ああ、それ、嘘。ごめん、陸を煽りたかっただけなんだ。本気にしたならごめん、謝る」

「嘘で良かった。と、咲良はホッとした。」

「俺さ、陸も咲良ちゃんが好きなんだと思ってたんだよな。けど、あいつ俺の芝居に乗ってこなかった。芝居がかってたのがバレたのか、それとも俺の思い違い？ 陸は……」

「いえ、いいんです、もう」

「咲良は大きく首を振って、竜輝の言葉を遮った。」

「陸が私をなんとも思っていないって分かって、スッキリしました」

「ホント？」

「竜輝に顔を覗き込まれる。」

「ホントって言うか……。もういいんです」

「竜輝は困ったような顔をして話し始めた。」

「陸とは友達だし、サークル仲間でもある。陸と咲良ちゃんが同居始めてさ、これで二人がうまくいくなら友達として嬉しいことだと思ってた。なのに、咲良ちゃんに彼氏が出来たって聞かされたら？ 陸との同居も解消になった。どういふことかなって、陸を観察してたんだ」

竜輝に「座ろつか」と、ベンチに誘われた。

横並びで座ると、竜輝は話をまだ続ける。

「咲良ちゃんは、彼氏と付き合ったけど別れた。その原因が陸だったわけだろ？ 陸が好きで忘れられないから別れた。なのに簡単に諦めるなよ」

ちゃんと告白しろ、と竜輝は咲良に詰め寄った。

「でも、振られるのわかって……」

「言わないと後悔するぞ？ 誰と付き合っても、あの時どうして陸に気持ちを伝えなかつたんだろって、絶対後悔するんだからな。当たって砕けろってことわざあるだろ？」

「砕けろってことですか？」

口をとがらせて竜輝に抗議する。

「無駄な告白になりますっ」

「ならないよ。言わずにウジウジ悩んでるより、潔く砕け散ったほうが、ずっとスッキリするってもんだよ？」

「そうなんでしょうか……」

咲良は考えた。

咲良がお気に入り入りのバラエティ番組で、好きな相手に告白して、一緒に日本に帰るってヤツがある。

みんな告白して、振られてもいつもスッキリしてるな。

「上手く行けば、一緒に日本に帰れるんですよね」

「え……日本？」

あ、しまった。違った。

「まあ、上手くいく可能性もゼロじゃないと思うよ」
竜輝は言った。

「俺の読みが正しければ、陸はさっきいきなりで躊躇^{とま}ってただけだ。もう一回、咲良ちゃんが真剣に言えば、聞いてくれるよ。なんなら実力行使すれば？」

「実力行使？」

「そう。アイツさ、咲良ちゃんと住んでも手が出せないヘタレなヤツなんだよ。だからここは咲良ちゃんのほうから陸を押し倒せ！」
竜輝はそう言って笑った。

第六話（後書き）

七話に続きます。

咲良の想いが陸に届くかどうか。

次回の更新を楽しみにしていただけると嬉しいです。

第七話

次の日、咲良はサークルに顔を出した。
教室には陸しかいなかった。

竜輝に煽られ、勇気を出してここまで来たものの、咲良に気付いた陸の態度にくじけそうになる。

「あ、相変わらず淋しいねっ」

声をかけるが、陸は咲良を見ようとしなない。

やっぱり嫌われてるんだろうか。

「あのさ、陸」

「俺なんかに構ってる余裕ねーんだろ。彼氏と別れるほどに好きなやつがいるんなら、そつちを頑張ればいいだろ」

素っ気ない言い方に、さらに落ち込みそうになる。

「だって、いくら私が好きだって思ったって、伝わらないんだもん」

「告白したの？」

「……それはまだだけど」

「じゃあ、どうして伝わらないってわかるんだ」

「わかるよ。その人の言葉とか態度とか、私に対する気持ちが全然見えないっ！」

陸が眉をひそめて咲良を見た。

一瞬目が合ったけれど、すぐに陸は咲良から目を逸らす。

「俺に怒るなよ」

「だって……」

その人は、陸なんだから。

そう言えばいいだけだ。だけど、どう見ても陸の気持ちが自分にあるとは思えなかった。

「咲良が誰を好きなのか知らないけどさ、好きになってもらうの待ってるだけじゃ、いつまでたっても片想いのままだぜ。ツライだろ？俺と住んだり彼氏を作ったりして気持ちを紛らわそうとしてる

のかもしれないけどさ、そんなん逃避だろ。現実から目を背けてるだけじゃんか」

そうやって言うのは簡単だよ、陸。所詮他人事だもんね。わかってるよ。告白すればいいことくらい。

それが簡単に出来ないから悩んでるんだ。

「好きなやつに気持ちが届かない淋しさは、他の誰にも埋められねーんだよ」

「……なによ、わかったようなことばかり言って」

「わかるよ。俺だって好きな女、いるし」

どこか別の世界の言葉に聞こえた。

「い、いるの？ 陸……好きな人」

陸は読んでいた本をパタンと閉じた。

そして咲良をじつと見据えると、ハッキリ言った。

「いるよ。いるから片想いのツラさがわかるんだ」

「陸……」

「だけど、その女には好きなヤツがいるんだ。最初から振られてんだよ、咲良より可哀相だろ？ 俺」

陸にじつと見つめられて……違う、睨まれてるんだ。

好きな人からこんな風に軽蔑するように見られたら、もつどうしようもなくなる。

ほんの少しの勇気さえ、音もなく壊れていきそうだ。

「俺と同居してさ、俺に逃げてんのもかもしれないけど、その男の身代わりにされたくねーんだよな」

「そんなんじゃ、ない……」

陸の言葉が咲良の胸に深く突き刺さった。

今にも泣きそうになるのを必死でこらえる。

「その男に告白して振られたならともかく、言ってねーんだろ？ 告る勇気もないくせに、他人を巻き込むな」

絶対泣かないと頑張ったけど、無理だった。ぎゅっと目をつぶった拍子に涙が落ちた。

「ごめん、泣かせた」

陸が謝った。

「言うだけ言つといて、今さら謝らないでよ」

咲良は涙をたくさん浮かべたまま陸を睨んだ。

陸は一瞬、戸惑いを見せる。

「俺は咲良のために言ったんだ。咲良が現実逃避なことばっかやってるから……」

「何が咲良のためよっ！ 嫌いなんですよ、私のことなんか。嫌いなのに干渉しないでよ」

「嫌いなんか言ってるねーだろ？ それになんだよ、そっちが俺に逃げてるんだろ？」

ふに落ちない、と言うような表情を陸はした。

「嫌いだなんて、いつ言った？」

「だって、竜輝先輩が私のこと好きかって陸に聞いたとき、陸は、あいつ彼氏いるぞって言っただけだったし、竜輝先輩が私に告白するって言ったときも、勝手にすればって言ったじゃん。どうでもいいんでしょ、私のことなんか。嫌いだって言ってるようなものじゃない？」

「どうでもいいなら何も言わないだろ。こんな風に会話すんのも、嫌だろ」

「じゃあ、嫌いじゃないってこと？」

「まあな」

「……じゃあ、好きってこと？」

理屈からすれば嫌いの反対は、好きってことになる。

けれどこう言う場合、単純にそうはいかないことくらい、咲良にだってわかる。

「だけど、この際どうでもいい。」

咲良は覚悟を決めた。

「嫌いじゃないなら好きってことでしょ？ ねえ陸、答えなさいよ」

咲良は陸の腕をつかんで揺さぶった。

「なんだよ、放せよっ」

陸は咲良の手を振り払うようにして、腕を上げた。

咲良は振り払われた手を、ぎゅっと握り締めると、陸に向かって殴りかかった。

「陸のバカーッ！」

「ちよっ……」

陸は咲良の手首をつかんでかわした。

「なんだよいきなり。何をそんなに怒って……」

「陸が悪いんだからっ！」

もうやけくそだった。

「陸のばかー」

陸につかまれた手を振り払おうと、思い切り暴れる。

「何だか訳わかんねーんだけど。ってゆーか、落ち着けよ咲良」

「もう嫌だっ……」

陸にとっては、いい迷惑だろう。

訳がわからないって思うのも当たり前だ。

「私……」

だから、陸に伝えよう。

「陸が……私は、陸が……好き」

「……は？」

「そんな呆けたような顔しないでよっ」

「んなこと言っただって。咲良、言う相手間違ってるぞ。俺は咲良の好きなヤツじゃないだろ。俺に逃げるなって言っただは……」

「だから、陸だよ」

「え？」

「私の好きな人って、陸だよ。最初から今の今までずっと陸なんだからっ！」

ハッキリ伝えた。

目からは涙がボロボロこぼれた。

「咲良……」

「もうガマンできないよ。好きだよ、陸」

咲良は自分から陸の唇にキスをした。

「さく……」

陸の身体がびくと震えた。

だけど陸は咲良を押しつけようとはせず、やがて咲良の背中に腕を回してきた。

「咲良……」

きつく身体を抱きしめられて、キスが深くなる。

いつも近くにいたのに、触れることのなかった陸とキスしているなんて、信じられない気分だった。

咲良が陸の腕をぎゅっとつかんだ瞬間、唇が放された。

咲良はうつむいて、大きく息を吐いた。

「ごめん陸。急にこんなこと……」

言ってしまったから、咲良は急に身体力が抜けてしまう。ズルズルとその場に座り込んでしまった。

「ちよつ、大丈夫か、咲良っ」

陸が支えてくれなかったら、そのまま床に倒れてしまって、きつと二度と顔を上げられなかっただろう。

穴があつたら入りたい気分だった。

いくら竜輝に、押し倒せって言われたからって、本当に自分からこんな風にキスしてしまうなんて。

「咲良。あの、今の……本気なのか？」

陸が咲良の身体を支えたままの格好で、咲良の顔を覗き込むようにして聞いている。

「なにが？」

なんだっけ。

すっかり頭が真っ白だ。

「咲良は、俺が好きなのか？ 咲良の好きなやつって、俺のことだった？」

「……うん。陸が好き」

うなずいたまま顔が上げられない。

「ごめんね、陸」

「なんで、謝る？」

「だって、陸は私のこと、何とも思っていないのに。なのに無理やり強姦しそうになった」

「咲良」

陸が咲良の身体を抱き寄せた。

「何よ。同情？」

「違うよ。そうじゃない」

抱きしめた格好のまま、陸の手が咲良の髪を撫でている。同情だとしても嬉しかった。

何するんだって突き飛ばされないだけ、ずっと良かった。

目を閉じて、陸の胸に耳を当て、陸の早い鼓動を聞いていた。

「だいたい、咲良が彼氏なんか作るのが悪い」

「……え？」

「俺のほうこそ、咲良は俺のことは友達としか思っていないと思ってたよ。彼氏作るし、他に好きなやつがいるなんて聞けば、それがまさか自分のことだとは思わないだろ、普通。よっぽど自惚れてなきや、無理だって」

「自惚れてよ。陸なんだから」

「……なんだよ、そーゆーことは早く言えよ」

陸が咲良の身体を少し放す。そして咲良の頬に手を触れた。

「陸？」

ゆっくり顔を上げると、陸の微笑が咲良を見ていた。

「咲良……。俺、咲良とは無理だって決め付けてたから、自分の気持ち……封印してた」

封印？

咲良は瞬きするのも忘れて、陸をじっと見つめていた。

「咲良がいつも料理を作ってくれたり、俺の話を嫌がらずに聞いて

くれたりしてさ、一緒にいて心地よかった。ずっとあんな風に続けて行きたかったけど、咲良は彼氏を作っただろ？ 結局、俺の片想いだったと思っただよ」

「……片想い？」

「うん。咲良が彼氏といるほうが楽しいなら、応援しなきゃって思った。正直、あのまま一緒にいたら、いつか無理やり咲良のこと襲ったかもしれない。だから部屋を出たんだ。早く咲良の気持ちを知ってたなら、俺のほうから告白したのに」

「陸……」

「咲良が受け止めきれないくらい、俺の気持ちは大きいよ。ずっと好きだった」

第七話（後書き）

陸と両想いだったことがわかった咲良。
次回は最終回です。

宇宙いっぱいの愛

エピソード

竜輝が言っていた言葉を思い出す。

大丈夫。きつとうまくいく。

上手くいく可能性もゼロじゃないと思うよ。

陸はいきなりで躊躇^{ちゅうちゆ}ってたただけだ。もう一回、咲良ちゃんが真剣に言えば、聞いてくれるよ。

本当だった。

さすが陸の友達だけあって、ちゃんと陸の気持ちも気付いていたってことだ。

「サークル活動中だってゆーのに、俺たち何やってんだろ」
ふいに気が付いた、と言う顔で陸は言った。

「じゃあ、星空研究会らしく、告白する」
やっと咲良も落ち着いてきて、こんなことを言える余裕が出てきた。

陸の気持ちが分かったんだ。

まさかの両想いだったんだ。

何を言っても受け止めてくれる。

「ものすごく広くて大きな宇宙のなかで、陸に出会えたことは、すごい運命だと思う。そして好きになって、好きになってくれたことは、さらにすごい運命だよ。果てしなく広い宇宙の、無限の大きさに負けない愛。私の愛を陸にあげる」

「じゃあ、俺も咲良の告白に答えるよ」

「うん。言って」

「広大な宇宙から見れば、チリみたいにちいさな俺たちだけど、生きてるってことはちゃんと理由があるんだ。それが何なのか俺たち

には全部知ることには出来ないかもしれない。だけど、今わかったことがひとつある。俺は咲良を愛するために生きてるんだってこと」「私もだよ、陸。私のすべては陸に向かっている。宇宙規模で考えれば小さな愛かもしれないけど、いつか私の愛で宇宙を埋めつくしたいよ」「

「咲良の宇宙いっぱいのお愛、俺が独占?」

「私も陸のお愛。独占する」

陸と咲良は顔を見合わせ、どちらからともなく唇を合わせた。

陸の腕に抱きしめられて、咲良はそのぬくもりをかみしめていた。やっと想いが通じ合った奇跡の瞬間を、信じられない気持ちで味わっていた。

「あのさあ、咲良」

「なに?」

「地球ってさ、いい星だよな」

あれから陸は咲良の部屋に戻ってきていた。

再び陸との同居生活……いや、同棲生活の始まりだ。

陸のために買ったふとんは、押入れにしまったままだ。

せまいけれど、陸と一緒にベッドで寝起きするのが、楽しくて嬉しくてしょうがない。

「こんなときなのに、また星の話?」

陸に腕枕をされて、抱きしめられて、愛された後の余韻に浸っていたい、こんなときなのに陸は咲良よりも地球のことが気になるらしい。

「地球は永遠に続くのかって話なんだけど、どう思う?」

しょうがない。こういう陸が好きになったんだ。

咲良は陸の質問に真面目に答えた。

「地球が爆発して、人類滅亡とか?」

「なんだよ。地球は爆発しないし、人類も滅亡しねーんだよ」

「どうしてそう思うの？」

「思うんじゃない、そう確信する根拠があるんだよ」

「根拠？」

言い切る陸の話に耳を傾ける。

「遠い過去から続いている地球は、そう簡単になくならないんだよ」

「……それって根拠って言える？ 私は、危機感あるんだけどな。」

地球温暖化とか言われてるし、生態系も崩れてきてるんでしょ？」

「そうなんだ。そうなんだよっ咲良」

陸の目が変わった。

こうなってしまった陸の言葉を止めるのは、きつと不可能だ。

「ちゃんとそれに気付いた今こそが大事なときなんだっ！」

とうとう陸は、咲良をほったらかして、ベッドの上に起き上がってしまふ。

そして本棚からなにやら分厚い本を出してくると、開いて咲良に見せてくれる。

「大事なものは、地球を愛そうと思う心。つまり地球に対する愛なんだっ」

「……愛？」

「人間が地球を大事にしたいって言う愛を取り戻せるなら、きつと地球は回復するんだ。俺は車には乗らないぞっ。夏のクーラーも使わない！」

「……すごいね」

陸とのドライブは、一生無理かもしれない。

「たとえ俺一人でも環境破壊に関わらないようにする。人類みな兄弟なんだ。みんな仲良く手を取り合って、明るい未来に向かって……」

……

陸の言いたいことは良くわかるけれど、やっぱり他人が聞いたら「わかってるよ、ウザイ」って止められそうだ。

陸の話に付き合っただけなのは、やっぱり自分だけかもしれない

ないと、咲良はその特権？ と幸せを思っ
て苦笑した。

「陸ひとりじゃないよ。私も地球を大事にするよ」

そう言ったら、陸は嬉しそうに顔を綻ばせて、咲良をぎゅっと抱きしめてくれた。

エピソード（後書き）

読んでいただいております。ありがとうございました。
ぜひ感想をお聞かせくださいませ

宇宙いっぱいの愛

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9957b/>

宇宙いっぱいのお愛

2009年6月15日18時32分発行